『世界の日本語教育』18, 2008 年 6 月

日本語学習者の日本人イメージにみられる特徴とその形成要因

――韓国の大学における学習者と非学習者の比較――

呉　正　培*

キーワード：**日本人イメージ，日本語学習，日本語の授業，日本語の上達，対人コミュニケーション**

要　旨

本稿は，日本人という集団に対するイメージが日本人との対人コミュニケーションを阻害しうるという社会心理学の知見に注目し，日本語学習者の日本人イメージの実態とその形成メカニズムに迫るものである．具体的には，学習者と非学習者の比較を通して 1）両者の日本人イメージにおける違いと 2）両者の違いを生み出す要因を検討し，日本語学習の日本人イメージへの影響を探ることを目的とする．韓国のソウル，釜山，大田にある 3 大学で質問紙調査を行い，527 名（学習者 368 名，非学習者 159 名）の回答を分析の対象としている．日本人イメージの全体像を詳細に把握するために，従来検討されてこなかった新しいイメージを考慮し，自由記述式の質問紙法を用いた．回答者の日本人に対する記述は 3 名の判定に基づいて 23 カテゴリーに分類された．

学習者と非学習者の日本人イメージを比較した結果，学習者は日本人の対人関係のあり方に関するイメージをもちやすく，逆に国家イメージから派生した日本人イメージをもちにくいことを明らかにした．また，学習者と非学習者のイメージ全般の形成要因および対日情報源を分析した結果，両者の違いを生み出す背景要因として，日本語および日本関連の授業から得る知識，日本人との対人コミュニケーション経験，対日情報源の多様性を見出した．

以上の検討より，日本語学習が日本人イメージに与える影響には，日本語の授業による直接的な影響と，日本語の上達に伴う環境の変化（日本人との対人接触の増加，対日情報源の多様化）がもたらす間接的な影響があることが示唆された．

1. はじめに

社会心理学では，人間にはある信念をもつとそれと一致する事象が生じると予測し，その予測

*OH Jeong-bae：東北大学大学院文学研究科博士後期課程

に当てはまる事例を知覚しやすく，当てはまらない事例を無視しやすい傾向（仮説確証型の情報処理傾向）があるといわれている（上瀬，2003）．また，誰もが特定の集団の特徴に関する誇張された信念（stereotypes，ステレオタイプ）をもっており，その信念に基づいて他者を判断（stereotyping，ステレオタイプ化）しやすいことも明らかにされている．集団としての捉え方を個人に当てはめること自体に，個々人の特徴を考慮せずに他者を画一的に判断してしまう危険性が含まれている（上瀬，2003）．以上の社会心理学の知見は，日本語学習者（日本語の学習経験をもつ者，以下学習者）のもつ「日本人はこうである」といったイメージが，日本人との接触場面において先入観やステレオタイプとして働き，相手に対する正しい理解の妨げになりうることを示唆している．

本稿は，日本人という集団に対するイメージが日本人との対人コミュニケーションを阻害しうる側面に注目し，学習者の日本人イメージの実態とその形成メカニズムを検討するものである．本稿の目的は次の 2 点である．第 1 は，学習者が日本人についてどのようなイメージを抱いているのか，またそのようなイメージがどう形成されるのかを詳細に記述することである．第 2 は，学習者と非学習者の比較，また学習者間の比較を通して，学習者のイメージにみられる特徴とそれを生み出す要因を明らかにした上で，日本語学習が日本人イメージの形成にどう影響しているのかを探ることである．

2. 先行研究と本稿の特徴

2-1. 先行研究

海外の外国人が日本や日本人をどう見ているかについては，これまで数多くの研究がなされてきた．従来の対日イメージ研究では，主に国家（日本），国民（日本人），言語（日本語）に対するイメージが研究の対象となっている．日本と日本人に対するイメージを扱っている研究（辻村・金・生田，1982；辻村・古畑・飽戸，1987；飽戸・原，2000 など）が多い中，近年は日本語に対するイメージを中心とした研究（姜，2002；水野・王・米田ほか，2005 など）も行われている．しかし，対日イメージと日本語学習との関係を検討した研究（姜，2002；齊藤，2004）は数少ない．

日本語学習との関係を取り上げた齊藤（2004）は，韓国人大学生 412 名を対象に日本，日本人，日本語に対する意識調査（質問紙法）を行い，その中で学習者と非学習者の対日イメージの相違を検討している．日本，日本人に対するイメージとしては「とてもよい」「よい」「特に他の国の人と変わらない」「悪い」「かなり悪い」の 5 つを，日本語に対するイメージとしては「好き」「嫌い」「どちらでもない」の 3 つをそれぞれ提示し，そのうち 1 つを選ばせた．同研究では，

学習者は非学習者に比べて，また滞日経験のある人はない人に比べて，それぞれ日本，日本人，日本語に対してよいイメージをもっていることが報告されている．一方，姜（2002）は国立国語研究所が世界 28 ヶ国で実施した「日本語観国際センサス」の韓国データ（特定層でない一般の人 1,000 名）より，日本語学習経験の有無，滞日経験の有無，世代による対日イメージの違いを検討した.「日本語観国際センサス」の調査項目のうち「日本，日本人，日本語が好きか嫌いか」を尋ねた項目の回答を分析し，1)日本語学習経験や滞日経験のある人はない人よりも日本，日本人，日本語に対して好意的なイメージを抱いていること，2）10 代と 60 代は他の世代よりも日本，日本人，日本語に対して好意的なイメージをもっていることを示した.

従来の対日イメージ研究は，外国人の対日イメージを日本に対する誤解や偏見と捉え，国際社会における日本理解を深めるための方策（対日イメージの改善策）を講じているものが多い．そのため，従来の研究では，イメージの良し悪しが分析の中心となっており，何がイメージの好転をもたらすのかが最大の関心事であった．しかし，イメージの具体的な内容は何か，また各イメージはどのように形成されるのかを具体的に記述した研究はほとんど見当たらないのが現状である．日本語学習との関連においても，学習者が非学習者より好意的なイメージをもつことは示されているものの，どのようなイメージにどのような異なりがあるのか，また両者の違いがどう生み出されるのかまでは踏み込んでいない.

2-2. 本稿の特徴

従来の対日イメージ研究と異なる本稿の特徴としては，次の 2 点が挙げられる．第 1 に，ミクロ的な観点からイメージの内容と形成メカニズムに関する具体的な記述を試みている．本稿では，回答者の自由記述による内容調査を行い，回答者の言葉から日本人イメージの具体的な内容を詳細に記述している．また，多様な事例を検討した予備調査から独自の形成要因リストを作成し，各イメージの形成メカニズムに関する具体的な情報を提供している．日本語学習との関連については，学習者と非学習者の比較のみならず，学習者間の比較も加え，学習者のイメージにみられる内容的特徴を明らかにした上で，そのような特徴を生み出す要因までを検討している．第 2 に，日本人イメージが日本人との対人コミュニケーションに及ぼす否定的な影響に注目している．従来の研究の多くは，外国で形成されている対日イメージが，日本に対する誤解や偏見を招き，国家間(集団間)の葛藤や対立を惹き起こしかねないことに問題意識をもっていた．本稿は，学習者のもつ日本人イメージが，実際の日本人との接触において先入観として働き，対人コミュニケーションを阻害しうるという観点から，日本人イメージの実態と形成メカニズムにアプローチしている.

3. 研究方法

3-1. 予備調査の概要

本調査に先立ってPAC分析[1]を応用した半構造化面接法を用いて多様な事例を検討し，日本人イメージの内容とその形成要因に関する具体的な情報を収集した．調査は，2005年5月にソウルのK大学の学部生17名を対象に行った．イメージの測定における調査者の影響を最小化するために，PAC分析の「自由連想」「インフォーマントによる解釈」の技法を面接に組み入れた．質問項目は，イメージの内容と形成要因，日本人との接触によるイメージ変化，日本語学習の影響，個人属性（性別，専攻，学年，直接経験，日本語の学習経験など），日本語能力の自己評定の5つの部分から成り立っている．面接は韓国語で行い，所要時間は一人当たり40〜70分であった．日本人との接触経験がない人，日本語の学習経験がない人の場合，該当しない質問項目があったため，面接の時間は相対的に短くなった．

3-2. 予備調査の結果

出現頻度の高い（25%以上）イメージとしては，「独自的」（出現頻度：88.2%），「二面的」（64.7%），「用意周到的」（47.1%），「利己的」「性に開放的」（以上41.2%），「配慮的」（29.4%）の6つが導き出された．そのうち「二面的」「性に開放的」は，従来の対日イメージ研究でほとんど取り上げられなかった内容である．形成要因としては，韓国のテレビ（特にニュース），日本人との接触，日本語の授業（教師の話）が多く挙げられ，それらの要因が日本人イメージの形成に大きく影響していることが示唆された．インフォーマントの回答を個別に検討したところ，日本人イメージの内容において2つの傾向が見受けられた．第1に，好意的なイメージの真実性を疑うケースが多かった（17名中12名）．つまり，日本人との接触からポジティブな面を発見しても，先に形成された「二面的」「利己的」というイメージが働き，表面的な姿に過ぎないのではないかと常に警戒している．第2に，日本（国家）に対するイメージが日本人に対するイメージとして現れるケースが多かった（11名）．学校の歴史教育と韓国のテレビ報道から伝わる，過去と現在における日本政府の政治的な動き（帝国主義，靖国神社の参拝，独島[2]領有権の主張など）が，そのまま「利己的」「用意周到的」といった日本人イメージにつながっている．

日本人イメージと日本語学習の関連については，日本語学習が日本人イメージの形成に影響を与える2つの経路がうかがえた．第1は日本語の授業で発信される対日情報である．日本語教師

[1] 当該テーマに関するインフォーマントの自由連想項目をクラスター分析にかけてカテゴリー化し，インフォーマントによるカテゴリーの解釈に基づいて個人の態度やイメージの構造を分析する方法（内藤，1997）．

[2] 日本名は竹島．

から得た「本音と建前がある」「婉曲的にいう」などの情報が「二面的」「配慮的」といったイメージの形成につながっていることが報告された．第 2 は学習に伴う環境の変化である．日本語学習に伴って 1) 対日情報源が多様化し（学習者 12 名中 9 名），2) 日本人との接触が増え（8 名），3）日本に対する統合的志向が強まる（11 名）傾向がみられた．そのうち「情報源の多様化」と「接触の増加」は日本語能力との強い関連が示され，ある程度日本語が上達してから生じることがわかった．予備調査で得られた事例の詳細については，呉（2006）を参照されたい．

3-3. 本調査の概要

3-3-1. 調査の方法と内容

日本人イメージに関する具体的で信頼度の高い知見を見出すために，本調査では予備調査の結果を反映した質問紙法を用いた．質問紙は，日本人イメージの内容に関する項目と，日本人イメージの形成要因に関する項目の 2 つから成り立っている．

(1)　日本人イメージの内容

予備調査では，従来の対日イメージ研究で扱われてこなかった日本人イメージ（「二面的」「性に開放的」）が存在していることを確認した．この結果から，日本人イメージの全体像を把握するためには，従来検討されなかった新しいイメージを考慮した調査が必要だと判断した．したがって，本調査ではイメージの測定において自由記述式の方法を用いることにより，新たな日本人イメージを探ることと，回答者の言葉からイメージの意味を正確に捉えることを目指している．設問は文章完成法によるもので，「日本人は＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿.」という文（5 つ提示）の空欄に回答者の日本人に対するイメージを自由に記述する形である．

(2)　日本人イメージの形成要因

予備調査では，イメージの形成メカニズムに関する多様な事例を検討し，日本人イメージの形成要因に関する具体的な情報を収集した．本調査では，予備調査の結果から作成した独自の形成要因リスト（表 1）を回答者に提示し，多数の選択肢から該当する項目を複数挙げてもらう形をとった．形成要因リストは，細分化した 28 項目から構成されており，従来の研究より具体的な情報を含んでいる．

形成要因に関する質問項目は，対日情報源，イメージ全般の形成要因，イメージの内容別形成要因，日本語の学習経験の 4 つに分かれている．4 つの質問項目の詳細は以下の通りである．

1）対日情報源：1 項目（形成要因リストから 5 項目まで選択）

2）イメージ全般の形成要因：1 項目（形成要因リストから 5 項目まで選択）

3）イメージの内容別形成要因：1 項目（記述した内容ごとに形成要因リストから 2 項目選択）

4）日本語の学習経験

①日本語の学習歴：1 項目（休んだ期間を除いた実質的な学習期間の記入）

表 1　日本人イメージの形成要因リスト

1）親の影響	16）日本のドラマ
2）中，高校の学校教育（歴史など）	17）日本の映画
3）韓国テレビのニュース，時事番組	18）日本の音楽
4）韓国テレビの日本紹介番組	19）日本語の授業，あるいは日本関連授業（日本語教師の話や教材など）
5）韓国のファッション雑誌	20）日本に居住した経験があるか，日本に詳しい親戚や友人の話
6）日本に関する韓国一般書籍	21）日本の製品を使用した経験
7）韓国の小説	22）学校や街で見かける日本人の印象
8）韓国のドラマ	23）日本を旅行した経験
9）韓国の映画	24）日本で生活した経験（語学研修など）
10）インターネット上の日本の動画	25）日本人日本語教師との接触経験
11）インターネット上の掲示板の日本経験話	26）日本人の友人との接触経験
12）日本のテレビ放送（NHK など）	27）“25）26）”以外の日本人との接触経験
13）日本のファッション雑誌	28）その他
14）日本の漫画，アニメ	
15）日本の小説	

少しでも学習したことがある人を学習者，まったく学習したことがない人（学習期間 0）を非学習者に分類した．

②日本語能力：1 項目（「読む」「書く」「聞く」「話す」能力の 5 段階の自己評定）

回答を領域別に 1～5 点に換算し，合計 20 点満点とした．

本調査では，回答者の個人属性を検討するために，性別，専攻，学年，直接経験（日本人との接触，滞日経験）を尋ねる項目を質問紙に付け加えた．日本人との接触に関する質問項目は，接触の対象によって友人との接触，日本語教師との接触に分かれている．

3-3-2. 調査の手続き

本調査は 2006 年 9 月 11～28 日に韓国の 3 大学（高麗大学校，釜慶大学校，忠南大学校）の学部生 538 名を対象に行った．記入漏れの多い回答者や対象者以外（日本人や大学院生）の回答は除き，最終的に 527 名（学習者 368 名，非学習者 159 名）のデータを分析の対象とした（有効回収率 98.0%）．

データの収集は，調査者（筆者）が大学の授業に出席し，韓国語で作成された質問紙を配り，その場で回収する形をとった．バランスのとれたデータを獲得し，信頼度の高い知見を導くために，サンプリングにおいて次の 4 点を考慮に入れた．

1）地域的な偏りを避けるために，韓国の北部地方（ソウル），南部地方（釜山），中部地方（大田）に所在する 3 大学で調査を実施した．

2）学習者と非学習者の比較のみならず，学習者間の比較も念頭に置き，学習者のデータを非学習者より多く集めた．

3）学習者における日本語専攻と他専攻の割合を同じにするために，日本語専攻者向けの授業，他専攻者向けの授業（教養日本語など）の両方で調査を行った．

4）初級から上級までの学習者を確保するために，多様なレベルの授業で調査を実施した．初級レベルの日本語専攻者は教養日本語の初級クラス，上級レベルの他専攻者は日本語専攻の授業に出席しているので，そこでデータを集めることができた．

本調査の有効回答者内訳を表 2 に示す．

表 2　本調査の有効回答者内訳

性別・所属大学　　%（人）

性　　別		所　属　大　学		
男性	女性	高麗大（ソウル）	釜慶大（釜山）	忠南大（大田）
47.1（241）	52.9（271）	40.0（211）	34.2（180）	25.8（136）

専攻・学年

専　　攻			学　　年			
日本語	文系（日本語以外）	非文系[3]	1 年生	2 年生	3 年生	4 年生
31.6（162）	35.9（184）	32.6（167）	34.9（174）	17.3（86）	26.7（133）	21.1（105）

直接経験

日本人との接触経験		滞　日　経　験	
有	無	有	無
63.9（335）	36.1（189）	34.4（178）	65.6（339）

3-3-3. 分析の方法：イメージのカテゴリー化

まず，調査者が回答者の日本人に対する記述内容（527 名，2,247 個）を検討し，分類の対象になる記述項目のリスト（852 項目）[4] と分類カテゴリー（30 カテゴリー）を設定した．分類カテゴリーの名称には，該当カテゴリーで出現頻度の高い項目，または代表性のある項目を使用した．各カテゴリーの意味を正確に示すために，複数の項目をカテゴリーの名称とした．次に，2 名の判定者（全ての記述項目に対する 1 次分類者）[5] と 1 名の調整者（2 名の判定が異なった項目に対する 2 次分類者）[6] に記述項目のリストと分類カテゴリーを提示し，1）直感による分類，2）分類カテゴリーの修正（統合，分離，名称の変更）および追加に関する意見を求めた．3 名

[3] 理学部，工学部，医学部などの専攻で構成されている．
[4] 非常に類似した複数の記述については，最も多く出現した記述を取り上げた．
[5] 韓国の大学で日本語学を専攻している韓国人大学院生（博士課程，男女各 1 名）．

の分類結果に基づき，判定者 2 名の判定が一致した項目と，判定者のどちらかと調整者の判定が一致した項目，併せて 641 項目（1,929 個の記述）を分析の対象とした．また，判定者と調整者の意見を反映し，分類カテゴリーを 36 カテゴリーと調整した．最後に，回答者の各記述に対して該当するカテゴリーの番号を SPSS のデータセットに入力し，36 カテゴリーの出現頻度を算出した[7]．その結果より，出現頻度 5% 未満の 13 カテゴリーを取り除き，日本人イメージの 23 カテゴリーを導き出した．

カテゴリーの名称の日本語訳については，日本語に精通している言語学専攻の韓国人留学生（博士課程，女性）によるバックトランスレーションを行った．すなわち，筆者が元データ（韓国語）を日本語に翻訳し，韓国人留学生がその日本語を韓国語に再度翻訳した．その後，元データと韓国語訳を照らし合わせ，日本語訳を微調整した．

4. 結　　果

4-1. 学習者の日本人イメージとその形成要因

4-1-1. 日本人イメージの内容別出現頻度

学習者の日本人に対するイメージの実態を把握するために，学習者グループにおける 23 カテゴリーの出現頻度を分析した．その結果を図 1 に示す．

最も出現頻度が高かったのは「二面的，本心がわからない」（50.3%）というイメージで，学習者の半数が抱いていた．次に高かったのは，「親切，やさしい」（38.8%）で，40% 近くの出現頻度を示していた．他に多く出現したのは，「開放的，自由奔放」（23.2%），「礼儀正しい，礼儀重視」（22.3%），「個人主義的，独立的」（20.1%）の 3 つで，いずれも 20% を超えている．一方，「残忍，好戦的，暴力的」は，出現頻度が非常に低く，5% を下回っていた．

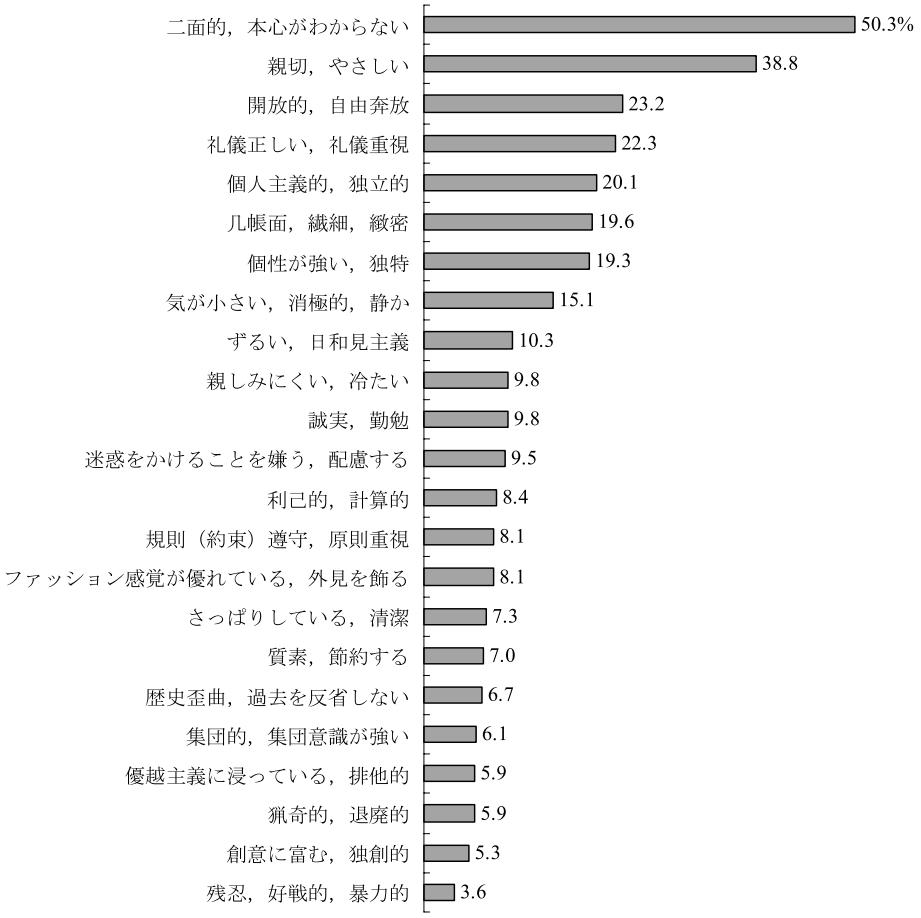
4-1-2. 日本人イメージの内容別形成要因

学習者の日本人に対するイメージの形成メカニズムを検討するために，学習者が自分の記述したイメージの形成要因として挙げたもの（形成要因リストから 2 項目選択）をカテゴリーごとに集計した．23 カテゴリーそれぞれにおいて形成要因として多く挙げられたもの（出現頻度 20% 以上の項目）を表 3 に示す．出現頻度 20% 以上の項目がなかったカテゴリー（「個人主義的，独立的」）については，最も多く挙げられたものを取り上げた．

---

[6] 韓国の大学で韓国文学の博士号を取得した後，日本の大学に勤めている韓国人教員（男性）．
判定者と調整者の選定においては，1）言葉に敏感であるか，2）韓国社会の動向に詳しいか，3）日本や日本人に関する背景知識をもっているかを考慮した．

[7] 36 カテゴリーのどれも出現しなかった回答者（16 名）は集計から除外した．



複数回答．N=358．23カテゴリーのどれも出現しなかった回答者=10.

図 1　日本語学習者における日本人イメージの内容別出現頻度

出現頻度 20% 以上の項目（22 カテゴリー，62 項目）を総合的に分析した結果，学習者の日本人イメージを形成する 5 つの主要因を見出した．第 1 は，日本のドラマとアニメ（漫画を含む）である．特にアニメは「開放的，自由奔放」「猟奇的，退廃的」「創意に富む，独創的」というイメージとの結びつきが強かった．第 2 は，韓国テレビの対日報道と高校までの学校教育である．「ずるい，日和見主義」「歴史歪曲，過去を反省しない」「残忍，好戦的，暴力的」といったイメージは，韓国のテレビ報道と学校教育から形成されやすいことが判明した．第 3 は，友人としての接触経験と滞日経験である．「親切，やさしい」「礼儀正しい，礼儀重視」は短期間の滞日経験（旅行），「迷惑をかけることを嫌う，配慮する」「規則遵守，原則重視」は長期間の滞日経験（生活）によって生まれやすいことが示された．第 4 は，日本語および日本関連の授業である．

表 3　日本語学習者における日本人イメージの内容別形成要因

イメージのカテゴリー	N	形　成　要　因	%
二面的，本心がわからない	180	日本語の授業，日本関連授業 滞日経験があるか，日本に詳しい親戚や友人 日本に関する韓国一般書籍	33.3 25.0 24.4
親切，やさしい	139	日本を旅行した経験 日本人の友人との接触経験	38.1 23.0
開放的，自由奔放	83	日本の漫画，アニメ 日本のドラマ 日本のテレビ放送	36.1 24.1 20.5
礼儀正しい，礼儀重視	80	日本のドラマ 日本を旅行した経験	26.3 21.3
個人主義的，独立的	72	日本のドラマ 日本人の友人との接触経験	18.1 18.1
几帳面，繊細，緻密	69	日本製品の使用経験 日本に関する韓国一般書籍	29.0 21.7
個性が強い，独特	69	日本のファッション雑誌 日本のドラマ	44.9 20.3
気が小さい，消極的，静か	54	日本語の授業，日本関連授業 滞日経験があるか，日本に詳しい親戚や友人 日本のドラマ	20.4 20.4 20.4
ずるい，日和見主義	37	韓国テレビのニュース，時事番組 中，高校の学校教育	45.9 43.2
親しみにくい，冷たい	35	日本人の友人との接触経験 滞日経験があるか，日本に詳しい親戚や友人	28.6 25.7
誠実，勤勉	34	日本語の授業，日本関連授業 韓国テレビのニュース，時事番組 韓国テレビの日本紹介番組	32.4 20.6 20.6
迷惑をかけることを嫌う，配慮する	34	日本人の友人との接触経験 日本で生活した経験 日本語の授業，日本関連授業 日本のドラマ	23.5 20.6 20.6 20.6
利己的，計算的	30	日本に関する韓国一般書籍 韓国テレビのニュース，時事番組 韓国テレビの日本紹介番組	26.7 23.3 20.0
規則（約束）遵守，原則重視	29	日本人日本語教師との接触経験 日本で生活した経験 日本人の友人との接触経験 日本のドラマ	27.6 25.0 20.7 20.7
ファッション感覚が優れている，外見を飾る	29	日本のファッション雑誌 日本のドラマ 学校や街で見かける日本人の印象 韓国のファッション雑誌	65.5 34.5 34.5 27.6
さっぱりしている，清潔	26	日本のドラマ 日本に関する韓国一般書籍	34.6 26.9
質素，節約する	25	韓国テレビの日本紹介番組 日本語の授業，日本関連授業	20.0 20.0
歴史歪曲，過去を反省しない	24	中，高校の学校教育 韓国テレビのニュース，時事番組 日本に関する韓国一般書籍 日本のテレビ放送	70.8 66.7 29.2 20.8
集団的，集団意識が強い	22	日本語の授業，日本関連授業 韓国テレビのニュース，時事番組 日本に関する韓国一般書籍	31.8 27.3 22.7
猟奇的，退廃的	21	インターネット上の日本の動画 日本の漫画，アニメ 日本のテレビ放送 日本の映画	47.6 38.1 28.6 23.8
優越主義に浸っている，排他的	21	韓国テレビのニュース，時事番組 日本人の友人との接触経験	38.1 23.8
創意に富む，独創的	19	日本の漫画，アニメ 日本製品の使用経験 日本のファッション雑誌	47.4 47.4 21.1
残忍，好戦的，暴力的	13	中，高校の学校教育 韓国テレビのニュース，時事番組 日本の映画	38.5 38.5 23.1

イメージと形成要因は出現頻度の高い順．%は出現頻度．複数回答．

授業から得る知識は「二面的，本心がわからない」「気が小さい，消極的，静か」をはじめとする6つのイメージの形成に寄与していた．第5は，ファッション雑誌である．「個性が強い，独特」「ファッション感覚が優れている，外見を飾る」というイメージは，日本と韓国のファッション雑誌を通して形成されることが多かった．

4-2. 学習者と非学習者の比較

4-2-1. 日本人イメージの内容別出現頻度

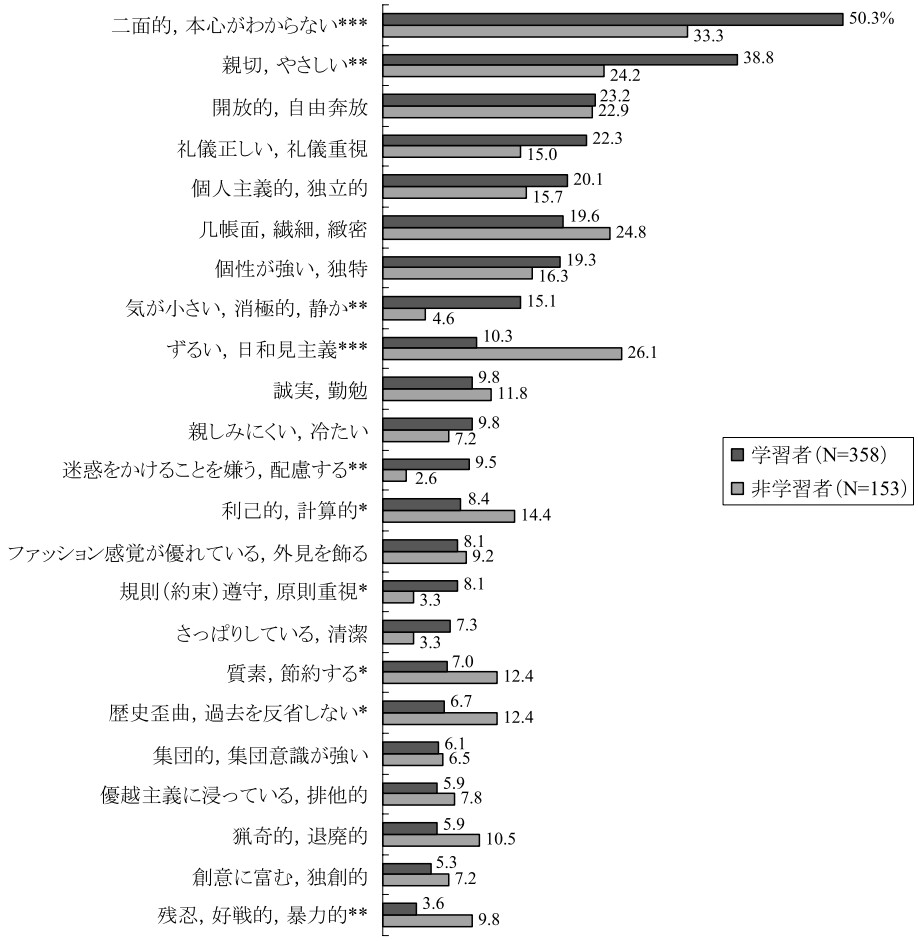
学習者の日本人イメージにおける特徴を明らかにするために，学習者と非学習者の23カテゴリーの出現頻度を比較した．その結果を図2に示す．

カイ2乗検定を行った結果，10カテゴリーにおいて有意差が認められた．学習者の出現頻度が非学習者より高かったのは，「二面的，本心がわからない」「親切，やさしい」「気が小さい，消極的，静か」「迷惑をかけることを嫌う，配慮する」「規則遵守，原則重視」の5カテゴリーであった．特に「二面的，本心がわからない」というイメージは，学習者と非学習者の差（学習者＞非学習者）が非常に大きく，日本語の学習経験との強い関連性が見受けられた．これに対して，「ずるい，日和見主義」「利己的，計算的」「質素，節約する」「歴史歪曲，過去を反省しない」「残忍，好戦的，暴力的」の5カテゴリーにおいては，学習者の出現頻度が非学習者より低かった．特に「ずるい，日和見主義」というイメージは，両者の差（学習者＜非学習者）が非常に大きく，日本語の学習経験と強い負の関係にあることが示された．

4-2-2. 対日情報源

学習者の対日情報源における特徴を検討するために，学習者と非学習者が自分の主な対日情報源として挙げたもの（形成要因リストから5項目まで選択）をそれぞれ集計した．両者の主な対日情報源（出現頻度の高い順で10位まで）を表4に示す．

学習者と非学習者の対日情報源の比較からは，学習者の対日情報源における3つの特徴が見出された．第1に，日本のメディアから生の情報を多く得ている．学習者グループでは日本のメディアが10位までの情報源の半数（5つ）を占めていた．特にドラマとアニメ（漫画）は，学習者の最も大きな対日情報源となっている．第2に，非学習者に比べて韓国のテレビ報道と学校教育への依存度が低い．韓国のテレビ報道と高校までの学校教育は，非学習者グループでは50％を超える出現頻度で1，2位に挙がっていたが，学習者グループでは5，6位と順位を大きく落としていた．第3に，日本語および日本関連の授業と直接経験が重要な情報源となっている．学習者グループのみにおいて日本語および日本関連の授業（3位）と友人としての接触経験（9位）が10位内に入っていた．また，表にはないが，学習者グループでは対日情報源として「日本を旅行した経験」（11位，19.9％）を挙げる人も少なくなかった．



カイ2乗検定．* : p<.05．** : p<.01．*** : p<.001．
23カテゴリーのどれも出現しなかった回答者=16(学習者=10, 非学習者=6).

図 2　日本語学習者と非学習者の日本人イメージの内容別出現頻度

4-2-3. 日本人イメージ全般の形成要因

学習者のイメージの形成要因における特徴を探るために，学習者と非学習者が自分のもつイメージ全般の形成要因として挙げたもの（形成要因リストから 5 項目まで選択）をそれぞれ集計した．その結果（出現頻度の高い順で 10 位まで）を表 5 に示す．

学習者と非学習者のイメージ全般の形成要因を比較したところ，学習者の形成要因における次の 4 つの特徴が導き出された．第 1 に，日本のドラマとアニメ（漫画を含む）の影響が最も大きい．非学習者グループでは韓国のテレビ報道と学校教育が 1,2 位に挙がっているのに対し，学習者グループでは日本のドラマとアニメ（漫画）が 40% 近くの出現頻度で 1，2 位を占めている．

表 4　日本語学習者と非学習者の主な対日情報源

学習者（N＝367）		%	非学習者（N＝158）		%
1	日本のドラマ	49.9	1	韓国テレビのニュース，時事番組	60.8
2	日本の漫画，アニメ	49.6	2	中，高校の学校教育	52.5
3	日本語の授業，日本関連授業	38.1	3	日本の漫画，アニメ	38.6
4	日本の映画	29.4	4	日本の映画	31.6
5	韓国テレビのニュース，時事番組	27.5	5	インターネット上の日本の動画	30.4
6	中，高校の学校教育	26.4	6	韓国テレビの日本紹介番組	28.5
7	日本の小説	23.7	7	日本のドラマ	24.1
8	日本のテレビ放送	22.3	8	インターネット上の掲示板（経験談）	22.8
9	日本人の友人との接触経験	20.2	9	日本に関する韓国一般書籍	22.2
9	滞日経験があるか，日本に詳しい親戚や友人	20.2	10	滞日経験があるか，日本に詳しい親戚や友人	21.5

%は出現頻度．複数回答．無回答＝2（学習者＝1，非学習者＝1）．

表 5　日本語学習者と非学習者の日本人イメージ全般の形成要因

学習者（N＝367）		%	非学習者（N＝158）		%
1	日本のドラマ	40.6	1	韓国テレビのニュース，時事番組	50.6
2	日本の漫画，アニメ	39.8	2	中，高校の学校教育	44.3
3	中，高校の学校教育	27.0	3	日本の漫画，アニメ	31.0
4	韓国テレビのニュース，時事番組	25.1	4	韓国テレビの日本紹介番組	25.9
5	日本人の友人との接触経験	24.0	5	日本の映画	25.3
6	日本の映画	22.9	6	インターネット上の日本の動画	24.1
7	日本語の授業，日本関連授業	21.8	7	日本のドラマ	18.4
8	日本を旅行した経験	21.0	8	日本の小説	16.5
9	滞日経験があるか，日本に詳しい親戚や友人	17.4	9	日本に関する韓国一般書籍	14.6
10	日本の小説	16.3	9	滞日経験があるか，日本に詳しい親戚や友人	14.6

%は出現頻度．複数回答．無回答＝2（学習者＝1，非学習者＝1）．

第 2 に，非学習者に比べて韓国のテレビ報道と学校教育から受ける影響が小さい．韓国のテレビ報道と高校までの学校教育は，非学習者グループでは 40% を上回る出現頻度を示していたが，学習者グループでは 2 つとも 30% に達していない．第 3 に，直接経験の影響が大きい．学習者グループでは友人としての接触経験（5 位）と日本を旅行した経験（8 位）が 10 位内に挙がっているが，非学習者グループでは直接経験のいずれも 10 位内に入っていない．第 4 に，日本語および日本関連の授業の影響が小さくない．日本語および日本関連の授業は，非学習者グループではその影響が非常に小さかった（22 位，5.1%）が，学習者グループでは形成要因として 7 番目に多く（21.8%）挙げられていた．

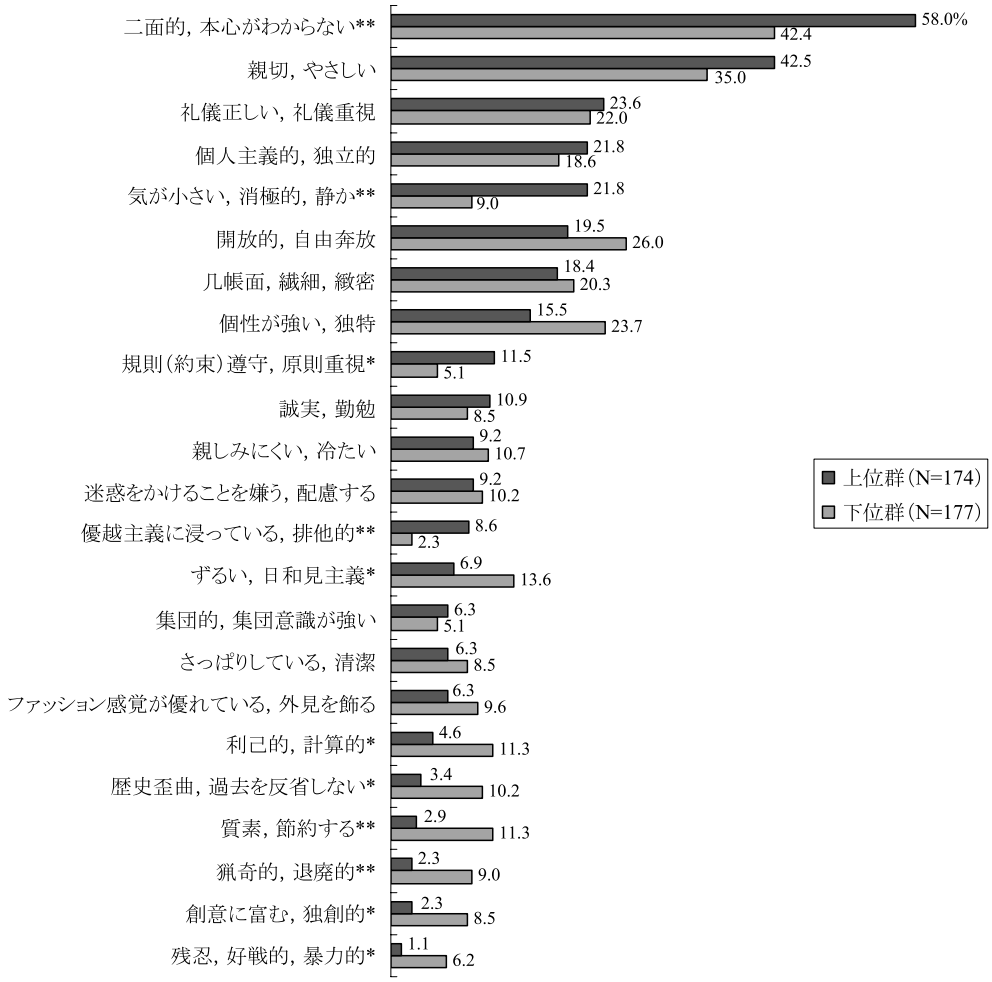
4-3. 学習者間の比較

4-3-1. 日本人イメージの内容別出現頻度

日本人イメージが学習者の間でどう異なるのかを調べるために，学習者を日本語能力の上位群

と下位群に分け[8]，日本語能力の高低による 23 カテゴリーの出現頻度を比較した．その結果を図 3 に示す．

カイ 2 乗検定の結果，11 カテゴリーで日本語能力の高低による有意差が認められた．上位群の出現頻度が下位群より高かったのは，「二面的，本心がわからない」「気が小さい，消極的，静か」「規則遵守，原則重視」「優越主義に浸っている，排他的」の 4 カテゴリーであった．一方，「ずるい，日和見主義」「利己的，計算的」「歴史歪曲，過去を反省しない」「質素，節約する」



カイ2乗検定．* : p<.05．** : p<.01．無回答=7.
23カテゴリーのどれも出現しなかった回答者=10(上位群=3, 下位群=7).

図 3　日本語能力の高低による日本人イメージの内容別出現頻度

[8] 自己評定得点（20 点満点）の中央値（12 点）を基準に，12 点までを下位群，13 点以上を上位群に分類した．

「猟奇的，退廃的」「創意に富む，独創的」「残忍，好戦的，暴力的」の7カテゴリーにおいては，上位群の出現頻度が下位群より低かった．

学習者間の比較としては，日本語学習歴の長短によるイメージの相違についても検討した．その結果，学習者の日本人イメージは学習歴より日本語能力と連動していることがわかった．つまり，日本語能力による違い（11カテゴリー）が学習歴による違い（6カテゴリー）より顕著であり，学習歴による差が認められた6カテゴリーは，日本語能力による差がみられた11カテゴリーに含まれていた．日本語能力と学習歴が強い正の相関（Pearsonの積率相関係数＝.617，p＜.001）を示していることから，本稿では日本語能力の高低による比較のみを取り上げている．

4-3-2. 対日情報源

日本語能力の高低による対日情報源の異同を調べるために，上位群と下位群の学習者が自分の主な対日情報源として挙げたもの（形成要因リストから5項目まで選択）をそれぞれ集計した．両者の主な対日情報源（出現頻度の高い順で10位まで）を表6に示す．

表6　日本語能力の上位群と下位群の主な対日情報源

上位群（N＝177）		%	下位群（N＝184）		%
1	日本のドラマ	54.8	1	日本の漫画，アニメ	57.6
2	日本語の授業，日本関連授業	43.5	2	日本のドラマ	44.6
3	日本の漫画，アニメ	40.7	3	韓国テレビのニュース，時事番組	37.0
4	日本の映画	32.2	4	中，高校の学校教育	36.4
5	日本人の友人との接触経験	29.9	5	日本語の授業，日本関連授業	33.7
5	日本のテレビ放送	29.9	6	韓国テレビの日本紹介番組	28.8
7	日本を旅行した経験	27.1	7	日本の映画	26.1
8	日本の小説	26.6	8	インターネット上の日本の動画	21.7
9	日本人教師との接触経験	21.5	9	日本の小説	20.1
9	滞日経験があるか，日本に詳しい親戚や友人	21.5	10	日本に関する韓国一般書籍	19.0
10	滞日経験があるか，日本に詳しい親戚や友人	19.0			

%は出現頻度．複数回答．

上位群と下位群の対日情報源を分析したところ，日本語能力の高い学習者（上位群）の対日情報源において次の3つの特徴が見受けられた．第1に，直接経験が非常に大きな情報源となっている．上位群では友人としての接触経験（5位），日本を旅行した経験（7位），日本人教師との接触経験（9位）が上位を占めているのに対し，下位群では直接経験のいずれも10位内に入っていない．第2に，韓国のテレビ報道と学校教育への依存度が非常に低い．韓国のテレビ報道と高校までの学校教育は，下位群ではそれぞれ3，4位にランクされていたが，上位群ではいずれも10位内に挙がっていなかった．第3に，日本語および日本関連の授業から得る知識が多い．日本語および日本関連の授業の順位は，上位群（2位）の方が下位群（5位）より高かった．

4-3-3. 日本人イメージ全般の形成要因

日本語能力の高低による形成要因の相違を検討するために，上位群と下位群の学習者が自分のもつイメージ全般の形成要因として挙げたもの（形成要因リストから 5 項目まで選択）をそれぞれ集計した．その結果（出現頻度の高い順で 10 位まで）を表 7 に示す．

表 7　日本語能力の上位群と下位群の日本人イメージ全般の形成要因

上位群（N = 177）		%	下位群（N = 184）		%
1	日本のドラマ	42.4	1	日本の漫画，アニメ	44.6
2	日本人の友人との接触経験	37.9	2	日本のドラマ	39.7
3	日本の漫画，アニメ	33.9	3	中，高校の学校教育	32.1
4	日本を旅行した経験	28.2	4	韓国テレビのニュース，時事番組	31.5
5	日本で生活した経験	23.7	5	日本の映画	24.5
6	日本語の授業，日本関連授業	22.0	6	日本語の授業，日本関連授業	21.7
7	中，高校の学校教育	21.5	7	韓国テレビの日本紹介番組	16.8
8	日本の映画	20.9	7	滞日経験があるか，日本に詳しい親戚や友人	16.8
9	日本人教師との接触経験	20.3	9	日本の小説	15.8
10	日本のテレビ放送	18.6	9	日本の音楽	15.8
10	滞日経験があるか，日本に詳しい親戚や友人	18.6			

%は出現頻度．複数回答．

上位群と下位群の形成要因の比較からは，日本語能力の高い学習者（上位群）の形成要因において次の 2 つの特徴がみられた．第 1 に，直接経験の影響が非常に大きい．下位群では直接経験のいずれも 10 位内に挙がっていないのに対し，上位群では友人としての接触経験（2 位），日本を旅行した経験（4 位），日本で生活した経験（5 位），日本人教師との接触経験（9 位）が上位にランクされている．第 2 に，下位群に比べて韓国のテレビ報道と学校教育から受ける影響が小さい．高校までの学校教育と韓国のテレビ報道は，下位群ではそれぞれ 3，4 位を占めていたが，上位群では 7，12 位と順位を大きく落としていた．

5. 考　　察

5-1. 学習者の日本人イメージにみられる特徴

(1)　学習者がもちやすいイメージ

本稿では，学習者は非学習者より日本人に対して「二面的，本心がわからない」「親切，やさしい」「気が小さい，消極的，静か」「迷惑をかけることを嫌う，配慮する」「規則遵守，原則重視」というイメージをもちやすいことが明らかになった．さらに「二面的，本心がわからない」「気が小さい，消極的，静か」「規則遵守，原則重視」の 3 つについては，日本語能力の高い学習者が低い学習者よりもちやすいことが判明した．これらのイメージは，人に接する態度や人付

き合いの仕方を表している点で共通しており，日本人の対人関係のあり方に関する内容といえる．したがって，本稿の結果は，学習者，特に日本語能力の高い学習者が，日本人に対して「本音を示さず，深入りしない」といった対人関係のあり方に関する認識をもちやすいことを示唆している．

日本人の対人関係のあり方に関する認識は，日本人とコミュニケーションを行う際，相手の行動を理解する手がかりとなり，円滑なコミュニケーションに役立つと思われる．しかし，一方では，既にもっている「本音を示さず，深入りしない」といった認識が，日本人に対する先入観やステレオタイプとして働き，目の前の相手に対する判断を歪め，結果的に日本人とのコミュニケーションを阻害する恐れもある．社会心理学では，特定の集団に関する固定化されたイメージは，その集団に属する個人の判断に用いられやすく，対人認知を歪める原因となることが指摘されている（上瀬，2003；村田，2004；宮本，2005 など）．本稿の予備調査においても，「日本人には本音と建前がある」という知識が活性化し，個人的に接触した日本人の親切な態度や配慮的行動を表面的なものに過ぎないかもしれないと疑ってしまう事例（5 件）が少なからず報告された．

(2)　学習者がもちにくいイメージ

本稿では，学習者は非学習者より日本人に対して「ずるい，日和見主義」「利己的，計算的」「質素，節約する」「歴史歪曲，過去を反省しない」「残忍，好戦的，暴力的」というイメージをもちにくいことが見出された．さらに 5 つのイメージのいずれも日本語能力の高い学習者が低い学習者よりもちにくいことが示された．形成要因の分析（表 3 参照）では，これらのイメージのうち「質素，節約する」を除いた 4 つのイメージが，主に韓国テレビの対日報道と高校までの学校教育によって形成されることが明らかにされている．予備調査では，韓国のテレビ報道と学校の歴史教育から形成された日本（政府）に対するイメージがそのまま日本人に対するイメージにつながっている事例（11 件）が多く観察された．これらの結果より，「ずるい，日和見主義」「利己的，計算的」「歴史歪曲，過去を反省しない」「残忍，好戦的，暴力的」といったイメージは，日本という国家に対するイメージから派生した内容といえる．したがって，本稿の結果は，学習者，特に日本語能力の高い学習者が，日本人に対して「ずるがしこく，歴史意識が足りない」といった国家イメージから派生した認識をもちにくいことを示唆している．

国家イメージから派生した認識は，侵略者や加害者としての過去志向的で否定的な内容が多く，幼少期の学校教育と韓国のマスメディア（テレビ報道）から形成されることから，日本人に対する偏見として韓国社会にかなり広まっていることが推測される．したがって，学習者（特に日本語能力の高い学習者）が日本人に対して国家イメージから派生した認識をもちにくいという本稿の結果は，日本語学習（具体的には日本語の上達）が韓国社会に共有されている日本人に対する偏見の解消に貢献する可能性を示している．予備調査では，日本語能力の高い学習者におい

て日本人を日本に対する感情から切り離して捉えようとする様子（2 件の事例）[9] がうかがえた．

5-2. 学習者の特徴を生み出す要因

(1) 日本人の対人関係のあり方に関する認識の形成

学習者（特に日本語能力の高い学習者）が日本人の対人関係のあり方に関する認識をもちやすいのは，次の 2 点から説明されよう．

第 1 は，日本語および日本関連の授業から得る知識である．学習者がもちやすい 5 つのイメージの形成要因を分析した結果(表 3 参照)，「二面的，本心がわからない」「気が小さい，消極的，静か」「迷惑をかけることを嫌う，配慮する」の 3 つの形成に日本語および日本関連の授業が大きく影響していることが示された．予備調査では，日本語の授業で教師から得た「日本人には本音と建前がある」「日本人は婉曲的にいう」などの知識がそれぞれ「二面的」「配慮的」というイメージの形成につながっている事例（8 件）が少なからず観察された．滞日経験者，あるいは日本に詳しい人としての教師から発信される情報は，信頼性の高いものとして学習者に吸収されやすいことが推測できる．また，日本語の授業を通して敬語表現や婉曲的な言い回しなど日本人の話し方やコミュニケーション行動に関する知識が獲得され，そこから日本人の対人関係のあり方に関する認識が生み出されることが考えられる．

第 2 は，日本人との対人コミュニケーション経験である．形成要因の分析（表 3 参照）から，学習者がもちやすい 5 つのイメージのうち「親切，やさしい」「迷惑をかけることを嫌う，配慮する」「規則遵守，原則重視」の 3 つは友人としての接触経験によって生まれやすいことが判明した．学習者と非学習者，日本語能力の高い学習者と低い学習者の友人としての接触経験に差があるかどうかを検討するために，日本人の友人との接触経験をもつ人の割合を比較した（カイ 2 乗検定）．その結果，接触経験者は，非学習者（24.2%）より学習者（43.8%）に多く（$p<.001$），日本語能力の低い学習者（25.1%）より高い学習者（63.1%）に多かった（$p<.001$）．予備調査では，学習を始めて間もない学習者が自分の日本語に自信がもてず，日本人との接触をためらう（2 件の事例）[10] のに対し，日本語能力の高い学習者は日本語教師以外の日本人との接触を自ら積極的に求める様子（2 件の事例）[11] が観察された．以上のことから，日本語の上達が日本人との対人接触を促し，その接触経験から日本人の対人関係のあり方に関する認識が形成されることが考えられる．

9「日本を憎むことは理解できるが，一般化して日本人に対してもよくない感情をもつのは残念に思う」「個別の日本人はいい人だと思っているが，国家としての日本は悪い国だと思っている」といった回答を得た．

10「もっと日本語が上達したら，日本人と接触する機会を作りたい」「日本語がもっと話せたら，日本に行ってみたい」といった回答を得た．

11 日本語能力の向上と多様な日本人との交流を目的に日本人留学生を支援する活動に参加する事例が報告されている．

(2) 国家イメージから派生した認識の弱化

学習者（特に日本語能力の高い学習者）が日本人に対して国家イメージから派生した認識をもちにくいのは，対日情報源の多様性から説明されよう．

学習者がもちにくい4つのイメージ（「質素，節約する」は除外）が韓国のテレビ報道と学校教育から形成されやすいことは形成要因の分析（表3参照）から既に明らかにされている．さらに，本稿では学習者と非学習者，日本語能力の高い学習者と低い学習者の対日情報源を比較し，学習者は非学習者より，また日本語能力の高い学習者は低い学習者より，対日情報源としての韓国のテレビ報道と学校教育への依存度が低いことを示した．韓国のテレビ報道と学校教育は，社会化の過程で誰もが接する情報源であり，当然ながら学習者もその影響を受けている．よって，学習者（特に日本語能力の高い学習者）の韓国のテレビ報道と学校教育への依存度が当初から低かったとは解釈しがたい．予備調査では，日本語学習を始めてから学習者に新しい情報源（日本語教師，日本のメディア，直接経験）が加わり，既存の情報源（韓国のマスメディアやインターネットなど）への依存度が低くなる傾向がみられた（学習者12名中9名）．そして，そのような傾向は日本語能力の高い学習者から多く報告された（日本語能力の上位群7名全員）．以上のことから，日本語の上達に伴う対日情報源の多様化が韓国のテレビ報道と学校教育への依存度の低下をもたらし，結果的に国家イメージから派生した認識の弱化につながるものと考えられる．

6. 結論と今後の課題

6-1. 日本語学習の日本人イメージへの影響

本稿では，学習者の日本人イメージの実態と形成メカニズムを分析した上で，学習者と非学習者の比較および学習者間の比較を通して，学習者のもつ日本人イメージの特徴とそれを生み出す要因を検討した．その結果，学習者，特に日本語能力の高い学習者は，日本人に対して対人関係のあり方に関する認識をもちやすく，国家イメージから派生した認識をもちにくいことを明らかにした．そして，日本人の対人関係のあり方に関する認識をもちやすい背景要因としては，日本語および日本関連の授業からの知識と日本人との対人コミュニケーション経験，国家イメージから派生した認識をもちにくい背景要因としては，対日情報源の多様性を見出した．

以上の検討より，日本語学習が日本人イメージに与える影響の2つのあり方が示唆された．第1は，日本語の授業による直接的な影響である．日本語および日本関連の授業から獲得される知識が日本人の対人関係のあり方に関する認識（「本音を示さず，深入りしない」）につながることが判明した．第2は，日本語の上達による間接的な影響である．日本語の上達が環境の変化（日本人との対人接触の増加，対日情報源の多様化）をもたらし，間接的に日本人イメージに影響を

与えるプロセスが見受けられた．具体的には，1）日本語の上達が日本人との対人接触を促し，その接触経験から日本人の対人関係のあり方に関する認識（「本音を示さず，深入りしない」）が形成されること，2）日本語の上達に伴う対日情報源の多様化が韓国のテレビ報道と学校教育への依存度を下げ，結果的に国家イメージから派生した認識（「ずるがしこく，歴史意識が足りない」）の弱化につながることが推測できた．

6-2. 今後の課題

今後の課題としては，次の 2 点が挙げられる．第 1 は，調査対象者を韓国人以外の学習者へ拡大し，学習者に共通するより一般的な知見を得ることである．本稿では韓国人のみを調査の対象とした．今後，他の国の学習者を含めた広範囲の調査を実施し，学習者の一般的な特徴と，特定の国籍や文化圏にみられる特徴を明確にする必要がある．第 2 は，同一の学習者を対象に縦断的研究を行い，日本語学習の影響を検証することである．本稿では学習者と非学習者を比較することによって日本語学習の日本人イメージへの影響を検討した．今後，日本語学習が進むにつれてイメージがどう変わっていくのかについて追跡調査を行い，学習者と非学習者の違いが日本語学習によるものなのかどうか，また日本語の上達に伴って環境の変化が起きるかどうかを検証することが求められる．

謝　辞

調査にご協力いただいた韓国の高麗大学校，釜慶大学校，忠南大学校の先生と学生の方々にこの場をお借りして感謝の意を表します．本稿の執筆に当たり，東北大学の鈴木淳子先生にご指導を賜りました．また，同大学の才田いずみ先生，名嶋義直先生に，貴重なご教示をいただきました．心よりお礼申し上げます．

参　考　文　献

飽戸　弘・原由美子（2000）「相手国イメージはどう形成されているか：日本・韓国・中国世論調査から（その 2）」『放送研究と調査』50（8），NHK 放送文化研究所，56–93.

岡　　隆・佐藤達哉・池上知子（編）（1999）『現代のエスプリ：偏見とステレオタイプの心理学』384，至文堂

呉　正培（2005）「韓国人大学生の日本人に対するステレオタイプ研究：日本語学習との関係」『文化』69（1・2），東北大学文学会，80–93.

呉　正培（2006）「韓国人大学生の日本人ステレオタイプに関する質的研究：日本語学習の影響を中心として」『日語日文學研究』第 59 輯，1，韓国日語日文學會，275–296.

上瀬由美子（2003）『ステレオタイプの社会心理学：偏見の解消に向けて』サイエンス社

姜　錫祐（2002）「韓国における日本語のイメージ：日本・日本人のイメージとの関連から」『東アジアにおける日本語観国際センサス』国立国語研究所国際シンポジウム第 6–8 回専門部会報告，国立国語研究所，

55–66.
金　由那（2006）「韓国語学習者の日本人と在日韓国人との意識の相違：韓国語・韓国・韓国人イメージと学習要因に着目して」『社会言語科学』8(2)，社会言語科学会，26–42.
小針　進（2004）『韓国人は，こう考えている』新潮社
齊藤明美（2004）「韓国の大学生の日本，日本人，日本語に対する意識とイメージ形成に影響を与える要因について」『日本語文學』第 21 輯，韓國日本語文學會，35–56.
新プロ「日本語」総括班（編）（1999）『日本語観国際センサス単純集計表（暫定速報版）』国立国語研究所
鄭　大均（1998）『日本（イルボン）のイメージ：韓国人の日本観』中公新書
辻村　明・金　圭喚・生田正輝（編）（1982）『日本と韓国の文化摩擦：日韓コミュニケーション・ギャップの研究』出光書店
辻村　明・古畑和孝・飽戸　弘（編）（1987）『世界は日本をどう見ているか：対日イメージの研究』日本評論社
内藤哲雄（1997）『PAC 分析実施法入門：個を科学する新技法への招待』ナカニシヤ出版
原由美子・塩田雄大（2000）「相手国イメージとメディア：日本・韓国・中国世論調査から」『放送研究と調査』50(3)，NHK 放送文化研究所，2–23.
水野義道・王　少鋒・米田正人・梁　敏鎬（2005）「東アジアにおける韓国語・日本語・中国語のイメージ」『韓國日本語學會第 12 回學術發表會論文集』韓國日本語學會，7–11.
宮本聡介（2005）「対人認知とステレオタイプ」唐沢かおり（編）『社会心理学』朝倉書店，15–28.
村田光二（2004）「集団間認知とステレオタイプ」亀田達也・村田光二（編）『現代の社会心理学』放送大学教育振興会，145–166.
Fiske, S.T.（1998）Stereotyping, prejudice, and discrimination. Gilbert D.T., Fiske, S.T., & Lindzey, G.（ed.）, *The handbook of social psychology*（*4th edition*）. 2, New York: McGraw-Hill, 357–411.